

エキノコ綺譚：ネコの眼・ノコの眼（「ノコギリヤネのある風景・その10」番外編）
～エキノコ玉ノ井〈家原利明作品展示「こわすのはかんたんだからね」所感に代えて～



2021.11.23～12.12
エキノコ玉ノ井（名鉄尾西線「玉ノ井駅」横）

綺譚（奇譚）とは不思議な話を意味する。「綺」は、古代日本の幅の狭いひも状の織物で、横糸に色系を用いて縞を織ると云う。エキノコ綺譚は、玉ノ井駅に隣接するノコギリヤネ（エキノコ）において、エキノコのオーナーを経糸とし、交錯する人たちが横糸となって紡がれる物語である。それは、永井荷風の小説『濃東綺譚』が墨田川（隅田川）東岸の私娼窟、玉ノ井を舞台としたように、木曾川東岸・玉ノ井の「ラビリンス（迷宮）」を舞台に展開される。

吾輩はネコである…。出だしを人間の世界で著名な小説を真似てみた。オレは、この玉ノ井駅のすぐ横に立つノコギリヤネを根城とするネコである。名前は…ない。エキネコでいいさ。ここにやって来たのは半年前あたり。暫くの間、台風で傷ついたままであった東の壁が剥がされ、躯体もあらわに透明のビニールが架けられた。それから、多くの人間たちが出入りするようになった。オレは、ビニールや建物の隙間から自由に出入りさせてもらっている。人間たちは、オレたちネコのような侵入者には、概ね好意的である。このオーナーにはあまり歓迎されていないかもしれないが、存在は了解してくれている。むしろオレには、そのくらいが丁度いい。

昔、工場（コウバ）と呼ばれていたこの建物は、およそ半世紀前までは、ここ尾張の地場産業である織物業を営んでいたらしい。まだ織物景気が続いていたが、金属加工に業種転換したという。それも、二十年ほど前に閉鎖し、それからは倉庫として使われていたようだ。フォークリフトとともに、荷物の運搬に使われたパレットなどが床積みされている。そして、駅のホーム沿いの壁が取り除かれた。閉じられていたノコギリヤネが開かれ、いろいろな人間が出入りするようになった。さながら公園のようだ。コウバは「公場」になった。

オレはここが気に入っている。荷物で迷路のようになった狭いところを歩き回るの面白い。この建物について人間たちは気づいていないことがある。ここには、「何か」がいるんだ。人間の言葉では、精霊というのかな。それが、建物なのか、あるいは空間そのものなのかわからないけれど、エネルギー、生命に近いような気がしている。子どもの中には、その気配をそれとなく気づく者がいる。アート系の人種にもいる。オレたちネコは、特に相性がいいかもしれない。ネコとノコだからな。

まあ、冗談はさておき、ここで家原利明という絵描きの作品展示があり、その制作過程をずっと見てきて、あらためて実感したよ。ここには、「何か」がいるということ。その「何か」が絵描きの創作力を引き出しているようでもあった。

その作家は、制作のアプローチからユニークだった。床をじっと見ているんだ。舐めるように念入りに。その視線はオレたちと同じだな。「ネコの眼」だ。そこに、近くの織物工場から分けてもらってきた余り物の高級布地を敷き詰めて、絵を描いていった。その作業は、躊躇することなく進行した。その姿に、ここの主人もじっと見入っていた。声を掛ける隙間がなかったのかもしれない。それは二日ほどのことだった。作家とこの空間、あるいは「何か」との共同作業のようにも思えた。そして、今度は、それを解体していった。

「こわすのは、かんたんだからね」

この展示会のテーマには、このノコギリヤネの建物のことも含めて、いろいろな意味が込められていると作家自身が言っていた。会場で展示されているのは、「こわされた」ものだ。完成品とはカタチが異なる。

オレは、一部始終を見ていたけれど、展示会に訪れた者からすれば、「作品はどこにあるのですか」という疑問がわくかもしれない。その答えは、「こわすのは、かんたんだからね」ということになるのだが、話はこれで終わりじゃない。幸いというか、ここの主人が制作プロセスを映像に収めていたのさ。床に敷かれた布地に絵を描き始め、完成品を「こわす」までの一部始終を。それは、天井から俯瞰する視点で撮影されたものだった*。オレは気づいたよ。これは、まさに「何か」の視点そのものじゃないか。オーナーである主人とノコギリヤネの「何か」は同じ視点で見ていたんだ。いわば、「ネコの眼」だ。この作品展示は、ネコの眼の制作過程をネコの眼が映像化することで成立していたという訳だ。

そうそう、期間中、主人のもとを訪ねてきた物好きな御仁のことを思い出した。市内にノコギリヤネがいくつ残っているのか衛星画像から数えたらしい。なんともご苦労なことだ。およそ2,000棟あると言っていたな。ここのノコギリヤネには非常に関心があるらしく、ここに至るまでの経緯などを聴いていた。そして、予期していなかったようだが、くだんの絵描きも現れて、オーナーを交えて対話が始まった。

その中で、ノコギリヤネの「何か」の正体に関わるような会話があった。正確じゃないが、概ね、こんなような内容だったと思う。

「別のところで聞きましたが、制作の前に展示場の雑巾がけから始めたと…」

「床には時間の層が堆積しています。このコンクリートのシミとかヒビなど、雑巾がけを通して、そこから伝わってくるものがあるんです。身体を通しての場所との対話です。

そうすると床に置いた布地に自然と浮かんでくるものがあるのです。絵を描くというよりも、それに色をつけただけという感じなのです」

「それは、ノコギリヤネの床が“土間”であることが大きいかもしれませんね。大地を通して伝わって来る生命力というか」

「場からこちらが受け取るということだと思います。だから、自分自身は、いつも空白であることを心がけていますね。いろいろなことを吸収できるように」

「ノコギリヤネは、“からっぽ”だと思う。でもそれは、ここで経過してきた時間の層が堆積した空間なんだ。だから、ノコギリヤネは創造の根源となるのかもしれない」

正直、オレにはよくわからないところもあるが、この作家の創作の原点とノコギリヤネ勘定御仁の語る“からっぽ”が、ノコギリヤネの「何か」について共鳴しているような気がする。

「こわすのは、かんたんだからね」

ノコギリヤネは、市内に2,000、玉ノ井だけでも80棟も残っている。崩れかかっているものもある。確かに、建て替えの需要がなければ、費用や税制面からも解体する理由はないのかもしれない。残ってしまっただけかもしれない。おそらく、早晚、消滅していくことだろう。

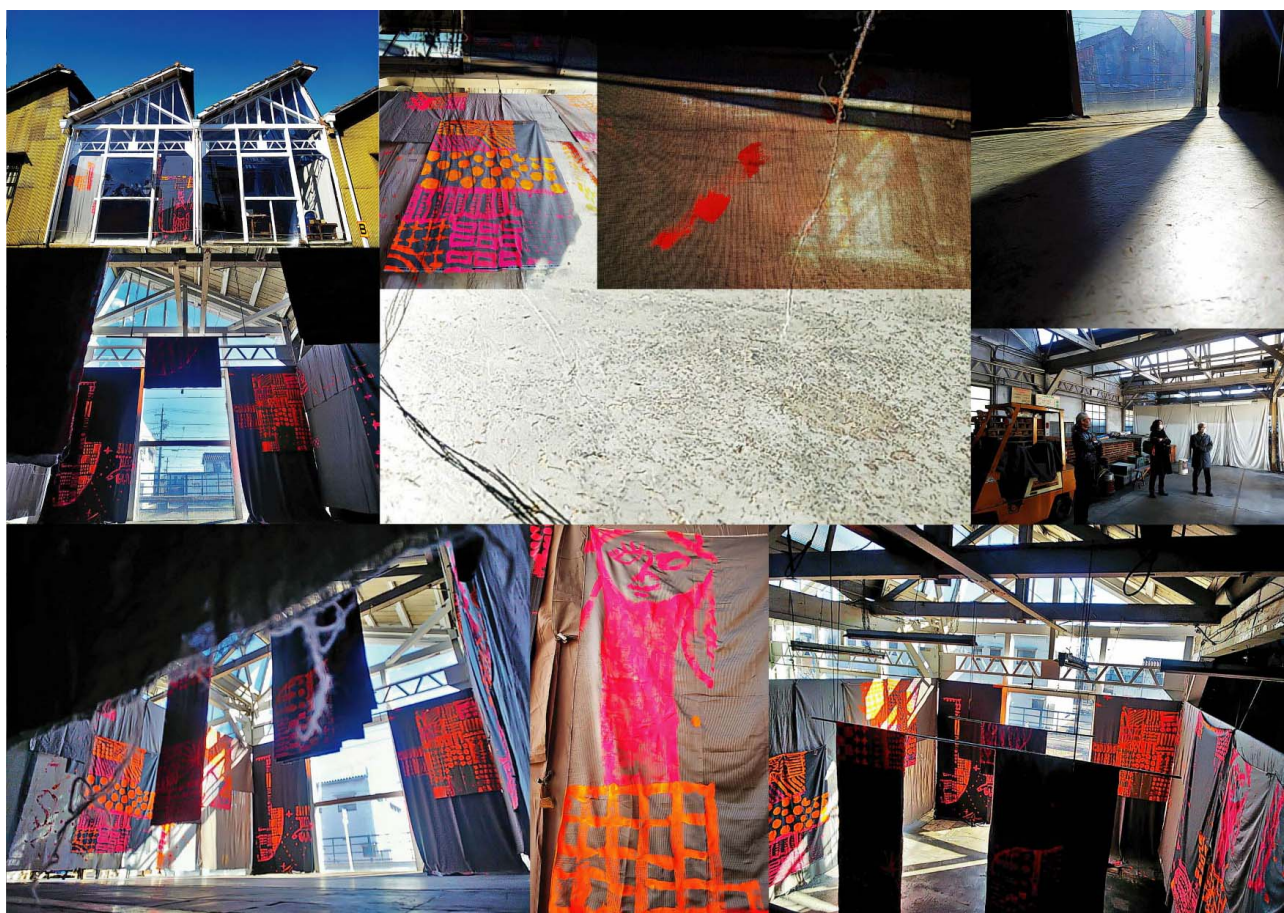
オレがここを気に入っている理由は、外からも内からも自由に出入りできて、歩き回れることもあるけれど、ここに「何か」がいるからだ。見守られているという感じだろうか。あの対話によれば、ここに時間が堆積しているからなのか。それには、多くのヒト、モノが出入りしてきたコウバだったことも関係しているかもしれない。そう、こわすのはかんたんだ。だから、その前に、一度、開いてみればいい。そして、“からっぽ”にしてみればいい。そうすれば、「何か」を感じるかもしれない。そうなれば、もっと…

えっ、こんなことを考えているオレはいったい誰なんだ。本当にエキネコのオレなのか。あの日、訪ねてきたノコ好きの御仁か。あるいは、このエキネコの「何か」だろうか。

2021.12.15

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住ノのこぎりニにノコギリアン・コウバを開設）

※ 家原さんの Instagram で「ノコの眼」（制作過程の映像）を体験することができます。



▲エキネココラージュ／ネコの眼・ノコの眼（写真協力：二坪の眼）